

第3回磐田市民文化会館跡地利活用懇話会 会議録

1 日時

令和2年12月12日(土) 13時30分～15時10分

2 会場

磐田市役所本庁舎4階 大会議室

3 出席者

懇話会メンバー16名（オブザーバー2名を含む）

佐藤 健司(静岡理工科大学 理工学部教授)
玉田 文江(磐田市自治会連合会 磐田支部長)
島岡 信生(磐田市自治会連合会 豊田支部長)
深田 研典(磐田市自治会連合会 豊岡支部長)
山下 貢史(みんなで軽トラ市 いわた☆駅前楽市 実行委員会)
山内 秀記(福田小学校 PTA 会長)
岩崎 哲也(豊田南中学校 PTA 会長)
青野 匠真(静岡大学工学部)
奥田 莉菜(常葉大学法学部)
石田 莉菜(磐田農業高等学校)
大石 優心(磐田農業高等学校)
左口 美紗(磐田農業高等学校)
平石 優芽(磐田農業高等学校)
柳澤 美月(磐田農業高等学校)
増田 祥(静岡理工科大学)
深井 理奈(静岡理工科大学)

事務局5名

鈴木 雅樹(秘書政策課長)
伊藤 豪紀(秘書政策課 部付主査兼政策行革推進グループ長)
鈴木 基輝(秘書政策課政策行革推進グループ 主査)

松下 隆(秘書政策課政策行革推進グループ 主任)
藤澤 裕矢(秘書政策課政策行革推進グループ 主任)

傍聴者12名

4 内容

(1) 開会

(2) 前回までの振り返り

資料1 参考資料(事務局説明)

(3) まちづくりについて

静岡理工科大学理工学部 佐藤健司教授「まちづくりについて」

跡地の利活用を検討するにあたり、「まちづくり」や「建築」の考え方について紹介する。

- 建築物を検討する際、最初に考えるのは人間の活動。都市計画(まちづくり)も人口が基本。20年後、30年後に人口がどうなっているかを考えなくてはならない。
- まちの地形や自然、文化や歴史も重要。磐田市には旧見付学校や国分寺公園など、歴史や文化がある。
- 意見交換で、移転が「さみしい」という声を聴いた。地元の方は喪失感があると思う。
- 旧市民文化会館は合併前の旧磐田市のシンボルであったと考えられる。小規模でも、人が集まることができる施設が必要ではないか。
- 跡地は現在の磐田市のシンボルである必要はないが、塔のように、地域(2~3万人、大きくみて7~8万人)のシンボリックなものになると、心の拠り所になる。
- 人口集中地区は最低 40 人/ha(4,000 人/km²)を基本としている。跡地を含む東西 2 km、南北 3 km内に旧磐田市の人口集中地区が、ほぼ収まる。したがって、概ね 6 km²(2×3 km)内の約 2~3 万人を対象とする施設規模を検討すればよいことになる。
- 都市計画の中心は小学校。歩いて通える範囲である概ね 1.3 km四方。小学校区単位でコミュニティ(まち)が形成され、7,000~1 万人程度をカバーする。そう考えると、一般的なコミュニティセンターの 4 倍程度規模の施設をイメージすると良いのではないか。(例:袋井西コミュニティセンター)
- 公共建築には、民間にはない「まちのシンボル」となる力がある。

○整備中の今之浦公園と一体的として検討することが必要であり、今之浦公園は、子どもの遊びや健康がテーマとなっている。跡地は、公園と役割を分けて、文化や歴史を体現する施設が考えられる。

○跡地の周囲には磐田農業高校や農林環境専門職大学があり、「農業」がキーワードになり得る。「食べる」ことにもつながり、まちおこしになるのではないか。

事例の紹介

サンマルコ広場(イタリア)、サンピエトロ広場(イタリア)、武蔵丘陵カントリークラブ(埼玉県)、北方町生涯学習センター(岐阜県)、奈良 100 年会館(奈良県)、深圳文化センター(中国)、グランシップ(静岡県)、オペラハウス(オーストラリア)、アクアイグニス(三重県)、ラコリーナ(滋賀県)

質疑

Q. まちづくりにおけるコロナの影響について

A. ○長期的には風邪と同じになると考えているが、大学においても多くの影響がでている。

○直接顔を合わせないとうまくいかない面もあり、早期に収まることを願っている。

Q. 裾野市でトヨタ自動車が進めている「まちづくり」についての考えは。

A. 計画の全貌が明らかになっていないためにわからないことが多いが、都市計画的には大きな規模ではないが、テクノロジーで先駆けを目指す取り組みだと認識している。

機械工学(自動車)の専門家の中には、無人運転の実用化によって、自動車が「所有する時代」から「利用する時代」に変わり、自動車が道路と同様に公共物となると言う者もいる。そうすると、街中の駐車場や住宅の駐車場が不要になるなど、まちづくりが大きく変わる可能性があると考えている。

まちづくりについての主な意見・感想

まちづくり全般について

- ・にぎわいのあるまちづくりの活力は「人」であり、様々な人との関わりを求めることで、「定住人口・交流人口・関係人口」が地域の担い手不足を補い、支えていくことにつながる
- ・公園や広場を活用した人と人とのふれあいが大切
- ・人口減少をとめるには、そこにとどまりたいと思ってもらえるような住みやすいま

ちづくりが必要

- ・まちのシンボルは、市民が集まり、市民の心の拠り所として継承していくことが必要
- ・遊びの施設を増やし、それぞれ単独ではなく、掛け算・コラボなどの連携が必要（例：水族館×美術館＝水槽の横や通路に絵を飾ってみる）

利活用を検討する視点

- ・跡地を新たなシンボルとして活用できないか
- ・市民が集まり、心の拠り所となる多目的なコミュニティ空間として、明るいイメージの「まちのシンボル」となって欲しい
- ・「磐田市といえば〇〇」と認知されるような場所・文化になると良い。秀でたものがあるところに人が集まると思う
- ・農業を1つのキーワードとして取り入れてみてはどうか
- ・「農業」「食」を中心として考えるのはよいと思う（市民農園や体験型のもの、物産販売等、農家との交流）
- ・市民のレガシーとなる計画になって欲しい
- ・昔の文化や歴史を残しつつも、新しいものやおしゃれなデザインを取り入れ、利用しても見るだけでも楽しい、子どもも大人も楽しめる場所をつくりたい
- ・様々な年代が交流できる施設
- ・多くの方に利用され、「また来たい」と思ってもらえるような場所
- ・幅広い年齢層が気軽に利用できる施設づくりが必要
- ・農業高校や企業との連携によって、中心市街地の賑やかさや明るさにつなげていきたい
- ・既にある施設が十分に活用されているとは言えない中で、新たな施設を活用できると思えない。今あるもので試行してから、跡地を検討することも大切では
- ・跡地の利活用は近くの住民（2～3万人）だけのものではなならないと思う

具体的な機能について

- ・磐田市の文化や歴史を知ることができる施設
- ・健康増進機能を持った施設
- ・勉強スペースや学生が交流できる場所と、子ども連れが行きやすい娯楽スペースなどが一体化した施設
- ・学生が勉強できるスペース。学習可能な場所の選択肢が増え、結果的に教育分野の強化につながる
- ・公園と一体化した施設ということであれば、疲れた体を癒す温泉や休憩スペース、フードコートなど
- ・農高と連携した農業体験や販売スペース、調理スペースなど

- ・特定の機能に絞るのではなく、様々なことに利用できるスペースの提供
- ・足湯など、「水」に関わるもの
- ・どの世代も利用できる機能
- ・室内、室外の両方で楽しめる場
- ・何のため、誰のための視点が重要

具体的な建築(デザイン)について

- ・塔のように建物に特徴があると色んな人に覚えてもらえる
- ・海外の建築や街並みを参考にすると良いのでは
- ・中で何が行われているのか「見える」、開放的な施設
- ・紹介された海外における視覚的なシンボル(塔やオベリスク)は、今之浦市有地・広場の整備があることから、新たにシンボルを作る必要性は薄いと思う。公園との連続性を求めるならば、シンボルではなく人々を呼び込む機能性を持たせる必要がある
- ・視覚的なシンボルは、その施設を維持するための利益を生み出す点においては必要
- ・その地域のシンボルになるようなものを取り入れた建築物を考えてはどうか。その場に溶け込むような形・色、特色を出す

(4) 今後の予定

(5) 閉会

以上